

楽園を象徴する韓国の古庭園、雁鴨池庭園

洪 光杓

(東國大學校教授／大韓民國)

1. 序論

記録や現在まで残された遺跡から見て、韓国の庭園は三国時代から造成されたものと見られる。古代に造成されたこれらの庭園はほとんどが水を中心としており、珍しい動物や植物が導入された楽園であった。このような楽園的概念の庭園は統一新羅時代、高麗時代、朝鮮時代を経る過程で継続的に造成されているが、現在まで残された庭園を見ると、宮闕、別墅、士大夫家、寺刹などで等しく造営されたことがわかる。

韓国の庭園が楽園という概念によって説明できる理由は、韓国庭園の追求する場所性が神仙思想を背景とする神秘的な場所¹⁾であり、仏教の浄土思想に立脚した極楽浄土²⁾のように人が理想郷的な世界として憧憬する特別な場所であることによる。

韓国では、武陵桃源、栗島、西方極楽浄土などが楽園に通ずる概念として考えられてきた³⁾。これらの理想郷は生の苦痛から解き放ってくれる場であり、完全な秩序を保つ美しい場所であった。したがってすべての人々がこのような理想郷を常に憧憬しつつも現実的にはそれに近づくことができず、庭園を造ることで現実世界からこのような理想郷に近づこうとしたのである。

韓国の古庭園の中でも、新羅王室の東宮に付属する慶州の雁鴨池庭園は神仙思想に基づき造成された楽園であった。この庭園は現存する韓国庭園としては最も古く、規模の面でも単一の庭園としては最大のものである。とくに雁鴨池は屈曲の激しい曲線護岸で形作られ、独特な造営美を誇っている。朝鮮時

代に造成された韓国庭園が陰陽五行思想に基づき形成された方形の池塘を中心に形作られたことが一般的であった点を考慮すると、雁鴨池は韓国における苑池の始原を示す貴重な資料と言える。

この研究は、雁鴨池庭園についての理解を通じて韓国の古庭園がどのような形式と内容で構成されていたかを明らかにすべく進められた。雁鴨池庭園を分析するための資料は、主に雁鴨池発掘調査報告書から蒐集し、先行研究結果と現場調査により発掘調査報告書で不足する部分を補った。

2. 結果および考察

(1) 概観

ア. 造営時期

『三国史記』卷6新羅本紀第7文武王14年(674)条には「宮内に池を掘り、山を造り、草花を植え珍奇な鳥と動物を飼っていた(宮内穿池造山 種花草 養珍禽奇獸)」という記事がある。また、『東国輿地勝覧』慶州条には「雁鴨池は天柱寺の北側にある。文武王が宮内に池を造り、石を積んで山を造り、巫山十二峰の象徴として草花を植え珍しい鳥を飼っていた。その西側に臨海殿の敷地があるが…(雁鴨池 在天柱寺北 文武王於宮内爲池 積石爲山 象巫山十二峯 種花卉養禽 其西有臨海殿…)」とある。この2つの記事から、雁鴨池が文武王14年(674)に造成された宮園池であることは明らかであり、雁鴨池に臨海殿という殿閣が存在したことがわかる。

一方、雁鴨池の発掘過程で出土した文瓦に「儀鳳四年」と記された銘文があるが、儀鳳4年は唐朝第3代高宗時代の年号で文武王19年(679)に該当し、ま

た「調露二年」と刻まれた埴片が出土しており、この調露2年は文武王20年に該当する。これを見ると『三国史記』と『東国輿地勝覧』の記事に誤りがないことがわかる。

雁鴨池が造成された当時の時代状況は、新羅が三国の統一を一応成し遂げたものの唐が新羅の地から完全には撤収しておらず、政治、社会的に極めて不安定な時期であった。このような時期に宮内に雁鴨池のような大きな池を掘った目的がどこにあったのかについては、未だ明らかにされていない⁴⁾。

イ. 名称

『三国史記』や『三国遺事』には雁鴨池という名称が見られない。雁鴨池という名称は『東国輿地勝覧』に初めて確認できるが、『東国輿地勝覧』が1481年に編纂された地理書である点を考慮すると、雁鴨池という名称は15世紀以前につけられたものと見るのが妥当と言えよう。一般的に学者の大半は、雁鴨池の新羅時代の呼称は月池であったと見ている(韓炳参、1982:40、鄭東晔、1986:53-4)。雁鴨池の新羅時代の名称を月池と考える理由は、憲徳王が太子を月池宮に住ませたとする『三国史記』の記録と、月池に関する職官として月池典と月池嶽典があったという理由による。

雁鴨池という名称については、梅月堂金時習の詩「四遊録」に収録された安夏池旧跡に見られる安夏池が漢字音の似た雁鴨池に換わったとする見解と、朝鮮朝の姜瑋の詩文「十二峯低玉殿荒 碧池依舊雁聲長 莫尋天柱燒香處 野草痕深内佛堂」に見られるように朝鮮時代に入り廃墟となった池に雁と鴨が棲む様子を見て雁鴨池と呼ぶようになったとする見解がある(朴景子、2001:121)。

ウ. 思想的背景

雁鴨池には池の中に3つの島がある。これは道教の神仙思想による蓬萊、瀛洲、方丈の三神山と思われる。一方、『東国輿地勝覧』慶州条に見られる「積石爲山 象巫山十二峯」との記録もまた、雁鴨池の造成背景が神仙思想であることを示すものである。

このほかに在来民間信仰としての龍王信仰もまた、雁鴨池造成の背景であった可能性もあるが、これを立証するに足る明らかな記録や遺物は存在しない。ただ雁鴨池の出土遺物である皿、碗、平鉢などの内底面に「辛審龍王」や「龍王辛審」などの文字が大きく陰刻されている点を見ると、雁鴨池で龍王祭を執り行なった可能性は考えられる(朴景子、2001:122-126)。

エ. 象徴的意味

『東国輿地勝覧』慶州条に「…西側に臨海殿の敷地があるが… (…其西有臨海殿…)」とした記事の存在を考慮すると、雁鴨池は海(とくに東海[日本海])を象徴する意味を持っていたことがわかる。これらの点から、雁鴨池の中に造成された3つの島が東海に浮かぶ三仙島を象徴するものとして無理なく関連づけることができる。一方、前述した龍王信仰が雁鴨池に介在していた場合、雁鴨池には龍が棲むという神秘性が添えられることになる。

(2)造成形式

ア. 空間構成

雁鴨池庭園は池塘である雁鴨池を中心に構成された。雁鴨池は土を掘り出して水を引き、掘り出した土で假山を築き島が形成されるように造られた人工池であり、その全体範囲は東西200m、南北180mとほぼ方形区域内に造成され、池の全体面積は15,658㎡である。

池は全体的な形態として「L」字形をなし、自然の地形を利用して直線と曲線が様々な変化を見せつつ調和を保つよう護岸を造成している(高敬姫、1989:21-22)。

池を中心に東側・北側は自然な曲線をなす丘陵として造成されており、西側・南側は建物敷地として造成されており、対照的な景観を見せている⁵⁾。

池の中には3つの島があり、池を中心に周辺を回遊できるよう動線体系が整えられている。

イ. 護岸

池の南岸と東岸は直線で処理し、北岸と東岸は複

雑な曲線で屈曲護岸をなす。護岸は磨いた石を積み上げたもので、護岸の石垣が直線処理された南岸と西岸は、地形上東岸と北岸に比べ約2.5m高く、護岸石垣も東岸と北岸より高く積み上げている。西岸には5つの建物が池に沿って造成されているが、これらの建物の基壇石垣は護岸石垣より池の方向に突き出る形で築造した。

北側と東側の護岸石垣は高さ1.5m前後の曲線石垣となっており、ほぼ垂直に1段で積み上げられている。一方、西側の護岸は直線で処理されており、建物のある場所は高さ1.8m前後の1段石垣、建物のない場所は下層護岸と上層護岸との間の幅が2mとなる上、下2段の石垣となっている。

建物敷地に接する護岸石垣の基壇は水没する部分についてはすべて長さ0.8m～2.3mの自然石を前面のみ磨いて積み上げ、水面上に見える部分の大半には長くて高い長台石(長さ1～2m、高さ55cm)を磨いて積み上げた。

池の南側護岸はほぼ単調な直線形態となっており、護岸と地面との間は傾斜面とし、その間に奇岩怪石を配置し花や木を植え造景を整えた。

池の護岸石垣の長さは計1,005mで、島の護岸石垣を含むと1,285mに達する。

ウ. 島

島は池の中に3つあり、最も大きい島(1,094㎡)は池の南側に長軸を東西にして位置し、中間の大きさの島(596㎡)は大きい島と向き合う池の西北側に位置し、最も小さい島(62㎡)は池の中央からやや南側にずれた位置にある。3つの島はすべて人為的に築造されたもので、高さ1.7m前後に積み上げた石垣の上に土で仮山を築いた。石垣の下には大きな川石を等間隔で配し護岸石垣を支えるようにした。

島には奇岩怪石を配置し珍しい花や木を植え、鳥や動物が棲んでいたことが発掘調査の結果判明している。

エ. 峡

東側の護岸には深い海峡のように屈曲した絶妙な

峡が3ヵ所見られる。2ヵ所はかなり深く、1ヵ所はさほど深くはない。この峡の際全体にかけて2.1m前後の石垣が約80°の傾斜で積み上げられており、これが山の盛土を保護している。

最も深い峡は北側の護岸に沿って東へ伸びたもので、深さがおよそ90m、峡の入口にあたる池の広さはおよそ30mであり、狭まった場所と広がりのある場所が連続し変化に富んでいる。最も狭い場所が約4.5mとなっており、この峡の周囲の護岸には20余の屈曲が見られる。峡の最深部にあたる場所には舟から降りられるよう4段の階段が護岸に設置されている。東側護岸の中心にある峡は深さがおよそ35m、入口の広さは約14mである。これらに次いでさほど深くない大きく屈曲すると見られる峡があるが、これは池の東側中央に位置し西側から真直ぐ見渡せるようになっている。

オ. 半島

東側の山と峡との間に半島が2つある。北側の半島はかなりの大きさで、東側から西側の池の中へ広がりながら横たわっている。この半島は付け根からの長さが65mあり12ヵ所に屈曲が見られ、大きく3つの突出面をなしており、複雑な海岸線のようにある。この半島の南側にあるもう1つの半島は池の東側護岸から北側へ向けて30mほど突き出している。護岸には6ヵ所ほど屈曲を加え変化を与えている。

カ. 山

雁鴨池の北側護岸の際には東西に約80mの長さを持つ山が3つの峰をなして配されている。山には自然石が配され、深く峻険な山の変化が感じられるよう造成されている。東側の護岸と半島にも山を造り、小さな峰々が連なっている。長い歳月を経て削られた点を考慮すると、現在より高かったことが想像できる。『東国輿地勝覧』などの古文献では、この山を巫山十二峰と記録しているが、山には美しい草花や珍しい動物が棲んでいたと思われる。

キ. 入水溝と出水溝

雁鴨池に水を入れる入水施設は池の東南端にあるが、自然石による石構－加工石で作った加工石溝－自然石による水溝施設－2つの石槽施設－小さな池－滝の形状をなす施設という6段階の構成からなっている。ここで特記すべき点は2つの石槽であるが、これは南北5m、東西4mの区間に南北の方向に置かれている。南側の石槽は長さ2.4m、幅1.65mの柔らかな曲線からなる亀の形で、石槽の周りを掘り水が溜まるようにし、北側の面に窪みを作り、ここを通る水が40cmほど低い位置に据えられた北側の石槽を満たすように作られている。北側の石槽は長さ2.66m、幅1.65mでこれも亀の形をしており、南側の石槽同様水を抜くための溝を設けた。南北の石槽の両側には長さ2.4m、幅1.2mの大きな板石を置きこれらの板石の外縁に長さ80cm前後、高さ28cmの外縁石を、屏風を囲むように配置した。滝の形をした施設は、小さな池を通過した水が幅2.5m、高さ70cmの層級石段を通過して3つの板石を利用して作った2段の滝を通して音を響かせながら池に落ちるようになっている。上下の板石の高低差は1.2mである。

出水溝は北側護岸の中間にあり、水位を調節する特殊施設、長台石を積み上げた石溝、木製の水溝、長台石の石溝など4段階で構成されている。特殊施設は、護岸石垣面に合わせ長さ1.5m、高さ0.3mの長台石を2段に積み上げ、1段と2段とをつなぐ部分に直径15cmの穴を開け、そこに木材の蓋を差し込んだものだった。また、2段の長台石のうち上部長台石の上面には幅15cm、長さ1m、深さ1cmの凹部の上に碑座形の何からの部材を置いたものと推測される。

ク. 植物と動物

雁鴨池の半島と島には種類も様々な珍しい草花と動物が棲んでいたとされる。『三国史記』文武王14年の記事からは、雁鴨池の島に植えられたものは灌木類や草花類であったと見られる。これは大木を植え

ると山の形や奇岩怪石を眺めることが出来なくなるためによる。このとき雁鴨池に導入された草花類は真平王の時代に新羅に輸入された牡丹や菊、蘭、クチナシ、香草、ツツジ、ザクロ、サンシュユなどの類と推定される(鄭在鍾、1996:56)。

一方、発掘調査の過程でガチョウ、鴨、山羊、鹿、豚、馬、犬の骨が出土し、当時雁鴨池に棲んだ動物についても想像することができる。

(3) 考察

ア. 楽園としての概念

雁鴨池は楽園としての性格を示している。これは、池の中にある3つの島が三神山を意味すると見られる点と、『東国輿地勝覧』慶州条に記述のある「雁鴨池に石を積んで山を造り巫山十二峰の象徴とし、草花を植え珍しい鳥を飼っていた」とする記事による。

雁鴨池の中に造成された3つの島は三神山を象徴するものと見られる。これは『三国史記』にある、百済の武王が634年扶余の宮南に池を掘り池の中に方丈仙山を模したとする記事から見て、雁鴨池に造成された三神山が即ち三神山説話に登場する蓬莱山、方丈山、瀛洲山のうちの1つと類推させるものである。一方、三国時代には花郎を国仙とも呼び、仙郎、神仙、仙または仙風とも呼称したが、これは神仙思想に根付くものである。これを見ると雁鴨池造成当時、韓国固有の神仙思想も流行したことがわかる。このような側面から、雁鴨池の3つの島への神仙思想の取り入れも大きな無理はなかったと考えられる。

『東国輿地勝覧』に見られる巫山十二峰は、中国の戦国時代、楚の襄王が冀州の雲夢で仙女と逍遥したとする古事に由来する。『古文真宝』前集七巻に記載された李太白の観元丹丘坐巫山屏風詩の註釈では、十二峰の呼称を望霞、翠屏、朝雲、松巒、集仙、聚鶴、浄壇、上昇、超雲、飛鳳、登龍、聖泉とした。一方679年に建立した東宮・正殿の名称は臨海殿といい、哀莊王5年(804)に東宮内に万寿房を建てた。『東国輿地勝覧』に見られる巫山十二峰や臨海殿、万寿房

などは神仙思想に関わりのある名称である(文化財管理局、1978:377)。このような点から、雁鴨池が神仙思想に基づき造成された庭園であることは明らかであり、このような神仙思想が楽園という理想郷的な世界と相通ずるものであることが理解できる。

イ. 雁鴨池造成のモチーフ

雁鴨池が造成される当時において新羅では東向重視思想が流行していた。その証拠としては、脱解王を東岳の神として推仰したこと、石窟庵本尊仏の方向を文武大王陵のある東海口側に向けて配置したことなどが挙げられる。新羅人たちにとって吐含山の向こう側にある東海は護国の源となる地であった。とくに東海口は海水と真水が出会う地点であり、海岸線の構造が複雑なりアス式海岸となっている。

雁鴨池が造成された東宮の主殿が臨海殿という名称を名乗っている点は、海に面する建物であるという象徴性を具体的に示すものである。この点から見て雁鴨池は、海を表現したものであり、とくに文武大王の水中陵のある東海口をモチーフにしたものと考えられる。

ウ. 雁鴨池前後の韓国庭園

文献上の記録や遺跡、遺物から見て、新羅時代に造成された庭園は雁鴨池が最初のものである。一方、百済時代に既に庭園が造られたとする記録もいくつか見られる。『三国史記』巻第25「百済本紀」第3辰斯王7年(391)条には「正月に宮室を改修し池を掘って山を築き、珍奇な動物や草花を育てた(春正月重修宮室 穿池造山 以養奇禽異卉)」とする記事があり、『三国史記』巻第26「百済本紀」第4東城王22年(500)条には「春に宮の東側に臨流閣を建てたが、高さが丈であった。さらに池を掘って珍奇な飛禽たちを飼った(春 起臨流閣於宮東 高五丈 又穿池養奇禽)」という記事があり、『三国史記』巻第27「百済本紀」第5武王35年(634)条には「3月に宮の南側に池を掘り、水を20余里にわたり引き入れ、池の端の4つの丘に柳を植え、池の中に島を造り方丈仙山を模した(三月 穿池於宮南 引水二十餘里 四岸植以

楊柳 水中築島嶼 擬方丈仙山)」という内容の記事がある。これを見ると百済の方が新羅に比べて庭園造成の歴史が古いことがわかる。

雁鴨池が造成された時点が、新羅が百済と高句麗を滅ぼし三国を統一した直後であった点を考慮すると、雁鴨池の造成に百済人が動員された可能性は充分考えられる。したがって歴史的に見て、雁鴨池は百済の庭園技術に基づいて造られた可能性が極めて高い。

一方、『日本書紀』推古天皇20年条(612)には「百済から帰化した路子王が宮室の南側の庭に須彌山を作り呉橋を架けた」との記録がある(金龍基、1996:406より再引用)。これらの記録を見ると百済の庭園造成の技法が日本にまで影響を及ぼしたと思われ、新羅の東宮園池である雁鴨池庭園と日本の古代庭園が多く面で類似性を持つ可能性を示唆している。

雁鴨池の造成以降、統一新羅時代に造られた龍江洞園池(嶺南文化財研究院、2001)と九黄洞園池(国立慶州文化財研究所、2008)は雁鴨池と同じく曲線護岸からなり、池の中に島を配しており(龍江洞園池は南北に2島、九黄洞園池は大小2島)雁鴨池と類似の形式であることが確認できる。これらの点から、雁鴨池と類似の形式を持つ池が庭園の中心に配されることが当時としては一般的な傾向であったと思われる。

新羅時代以後高麗時代、朝鮮時代を経ながら、宮闕をはじめとする数多くの場所に庭園が造成され、現在まで多くの庭園が残されている。これらの現存する庭園遺跡を注意深く観察すると、朝鮮時代の韓国庭園は陰陽五行説に基づく円島方池を中心に配して庭園を造成した傾向が見てとれる。庭園の中心となるこれらの円島方池は宮闕のみならず別荘、士大夫庭園などに例外なく見られ、雁鴨池のような形式を持つ池を見つけることが困難となる。この点から見て、朝鮮時代へ移行する過程で韓国庭園には雁鴨池のような池塘様式がそれ以上伝承されなかったと考えられるが、その理由は分らない。

3. 結論

雁鴨池庭園は統一新羅時代に造成された雁鴨池を中心に形成された韓国の古庭園である。雁鴨池は直線と曲線の護岸が神秘的な調和をなしており、池の中には3つの島があり三神島を象徴している。雁鴨池の東側と北側には山を造り奇岩怪石を用いて視覚的效果を高めているが、これは巫山十二峰を象徴するものと思われる。

雁鴨池の楽園としての象徴性は、やはり3つの島と巫山十二峰の存在によるものである。三神山と巫山十二峰は道教的概念の神仙思想に基づき形成されるものであり、神仙思想は現実世界では到達しえない神秘的な場所性を持つ。このような神仙思想が雁鴨池造成の背景にあったならば、雁鴨池が楽園としての象徴性を持つことに疑いの余地がないと思われる。

雁鴨池造成のモチーフはやはり東海であったと見るのが妥当である。東海の中でも、とくに東海口は新羅人にとっては聖なる地であった。このような聖なる地を常日頃訪ねて身近に感じることを新羅人は願望として夢見たであろう。

雁鴨池が造成されて以降、統一新羅時代に龍江洞園池と九黄洞園池に、雁鴨池と類似の屈曲の激しい曲線形の池塘が造成されたものの、高麗、朝鮮時代を経る過程で韓国の庭園は陰陽五行思想に立脚した円島方池を中心に造園することが一般的となり、これ以降雁鴨池の造成様式の伝承はなかったと思われる。ただ、日本庭園の池塘様式との類似性を見ることができ、造園様式が日本へいかに伝えられたのか注目されるところである。

この研究は雁鴨池に対する概括的な内容と造成形式を取りあげ、いくつかの重要な論点について考察した。今後、韓、中、日の3国において庭園についての比較研究が進めば、3国間の庭園様式の交流についての理解が深まるものと期待される。

註

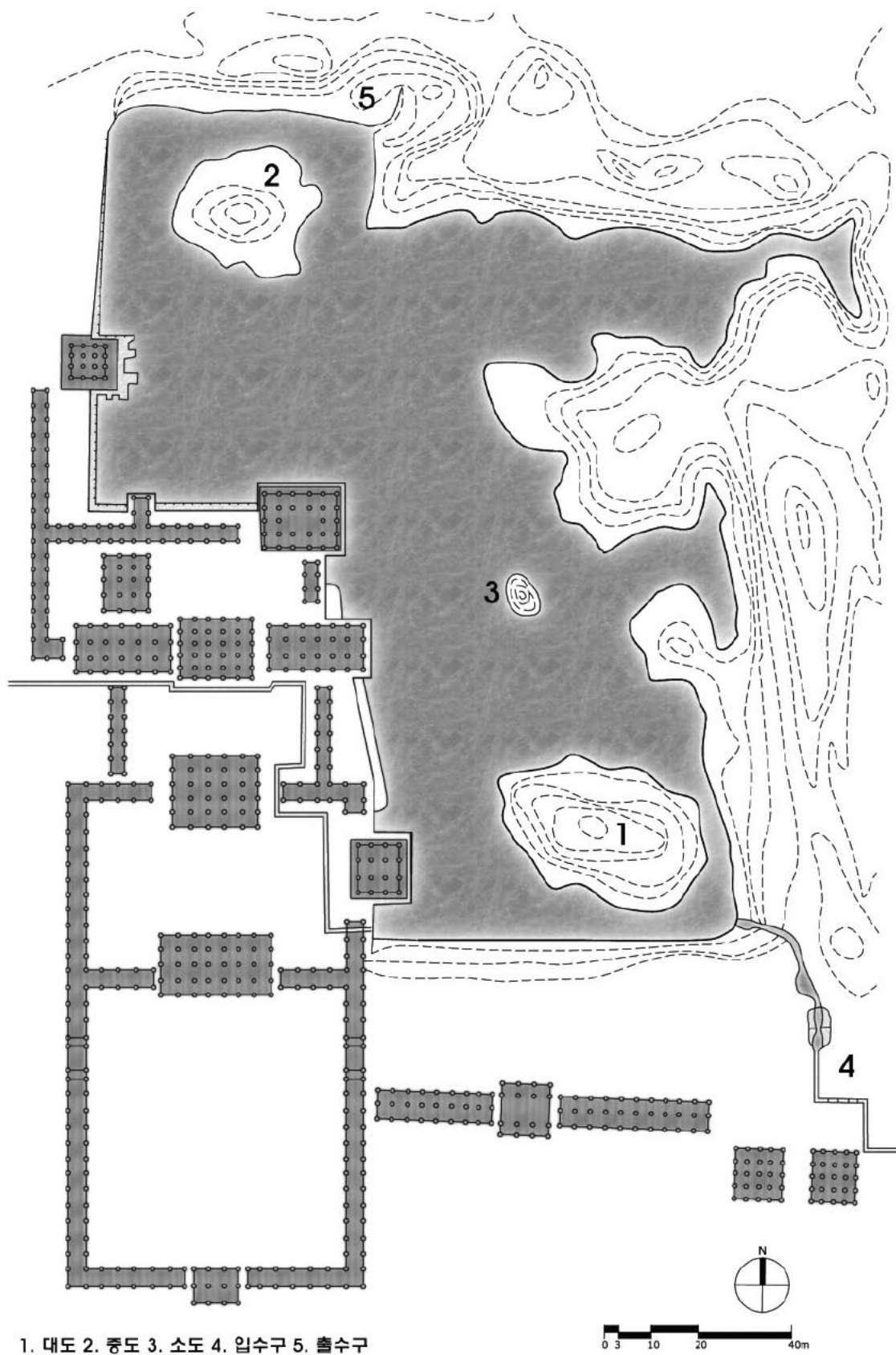
- 1) 三神山や巫山十二峰に代表される。
- 2) 韓国で浄土思想に基づき造成された庭園としては、仏国寺の九品蓮池をはじめとする庭園が代表的なものである。『仏国寺古今創記』には「嘉慶三年戊午年に蓮池の蓮の葉を返す」との記録があり、九品蓮池が浄土の象徴である蓮花を飾る皿としての機能を果たしていたことが確認できる。九品蓮池は浄土信仰の九品蓮台に由来する名称であり、浄土に往生する者が座った9種類の蓮花台が即ち九品蓮台である。九品蓮池は1970年代の仏国寺復元のための発掘調査の過程でその姿を現した。発掘調査の結果、九品蓮池は青雲橋と白雲橋の南側の泛影楼付近に位置し、東西長軸39.5m、南北長軸25.5m、深さ2～3mほどの蓮池であり、池の周囲には巨大な石が積み上げられていたという。九品蓮池や極楽殿へ登る蓮花橋、七宝橋は、互いに意味的なつながりを持つ。つまり蓮花橋は九品蓮台の中上品である蓮花台を意味する名称であり、七宝橋は中中品である七宝蓮台を意味する名称である。九品蓮池が蓮花橋と七宝橋そして安養門と極楽殿の前面部に造成されたことは、九品蓮池が極楽浄土へと進む過程であることを象徴的に表現するひとつの手段となるものであり、これら諸々の状況から見て九品蓮池が浄土庭園であることが確認できる。仏国寺に造成された浄土庭園-九品蓮池は、未だ復元されることなく土の中にその姿をとどめている。一日も早く完全な発掘を行ってその全貌を明らかにし、速やかに復元して韓国的概念の浄土庭園との出会いを実現すべきである。

なお、仏国寺の九品蓮池に関する内容については、参考文献11（※本報告書巻末の参考資料に日本語訳を掲載した。）を参照されたい。

- 3) 西洋人はユートピア (Utopia)、シャングリラ (Shangrila)、エルドラド (El Dorado) のような場所を理想郷と考えてきた。
- 4) 新羅が三国間の覇権争いで百済を滅ぼした時期は太宗武烈王7年(660)、高句麗を滅ぼした時期は文武王8年(668)、唐を新羅の地から完全に逐い出した時期は文武王16年(676)である。
- 5) 発掘調査の結果、雁鴨池の西側に全5ヵ所の建物跡が確認された(文化財管理局、1978)。

参考文献

- 1) 高敬姫, 1989, 雁鴨池, 대원사
- 2) 國立慶州文化財研究所, 2008, 慶州 九黃洞 皇龍寺址展示館建立敷地内遺蹟－九黃洞園池遺蹟
- 3) 金富軾, 1145, 三國史記; 李丙燾譯註, 1983, 三國史記上・下, 乙酉文化社
- 4) 金龍基, 1996; 韓國造景學會, 東洋造景史, 文運堂
- 5) 文化財管理局, 1978, 雁鴨池發掘調査報告書
- 6) 朴景子, 2001, 雁鴨池 造營計劃研究, 學研文化社
- 7) 嶺南文化財研究院, 2001, 慶州龍江洞園池遺蹟, 學術調査報告 30冊
- 8) 鄭腫旿, 1986, 韓國의 庭園, 民音社
- 9) 鄭在鏞, 1996, 韓國 傳統의 苑, 圖書出版 造景
- 10) 韓炳三, 1982, 雁鴨池 名稱에 대하여, 考古美術 153
- 11) 洪光杓, 1994, 佛國寺 蓮池에 관한 一考察, 韓國庭園學會誌 12 (2), p.p.75-82
- 12) 洪光杓・李相潤, 2001, 韓國의 傳統造景, 東國大 出版部



図－1 雁鴨池の配置平面図
(1. 大島 2. 中島 3. 小島 4. 入水溝 5. 出水溝)



図－2 雁鴨池 衛星写真（中央）と現在の風致景観

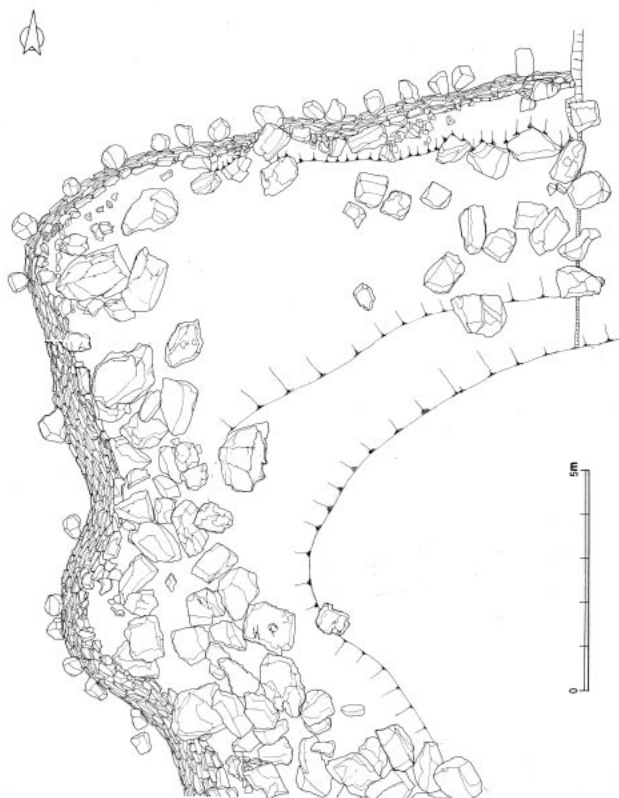


図-3 雁鴨池 護岸発掘平面図

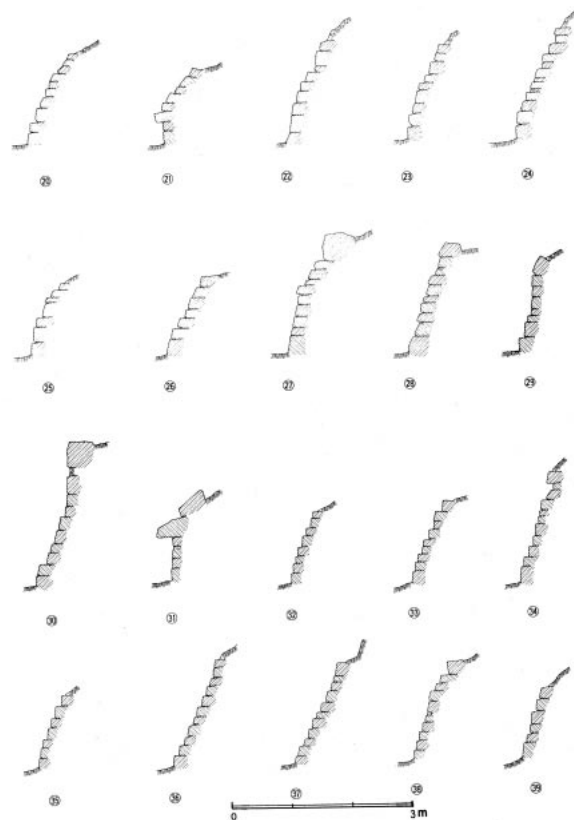


図-5 雁鴨池 護岸石垣断面図

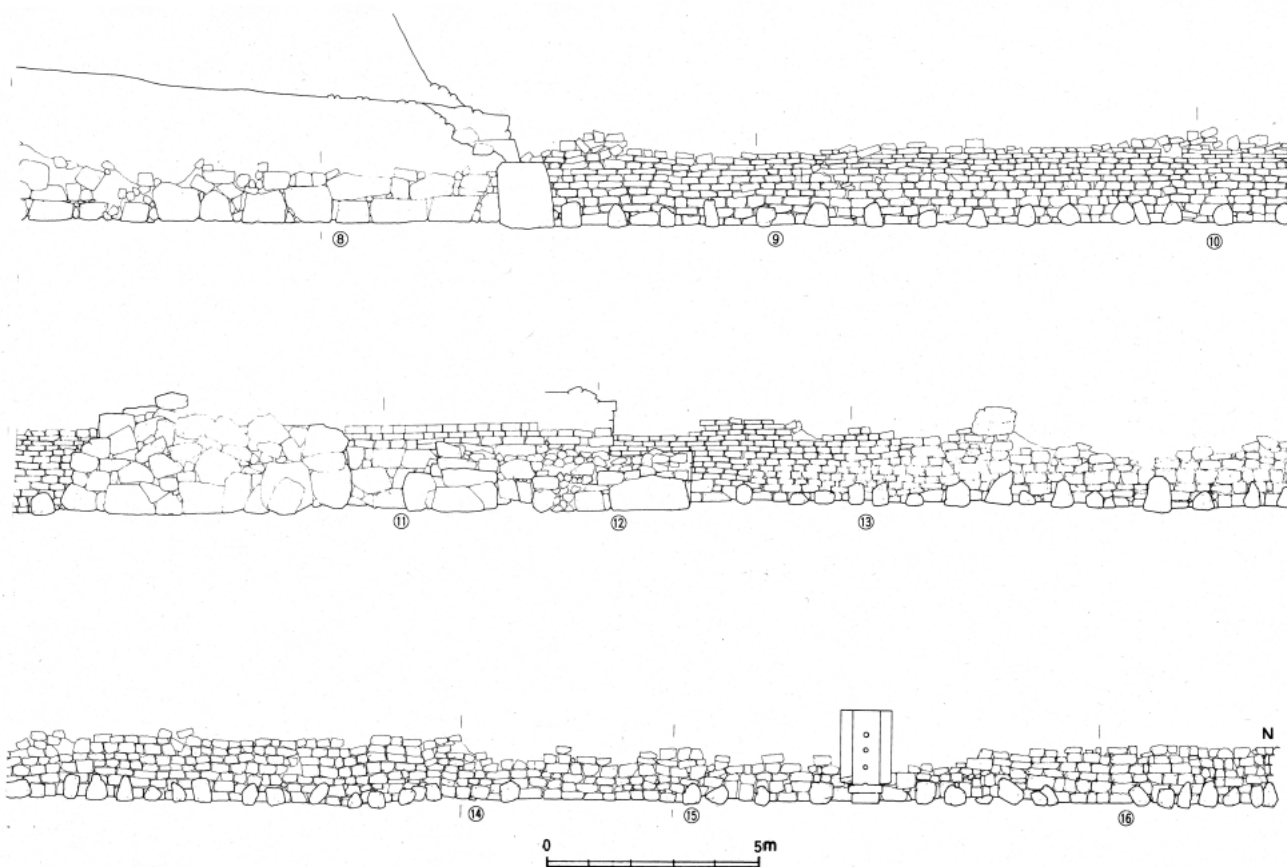
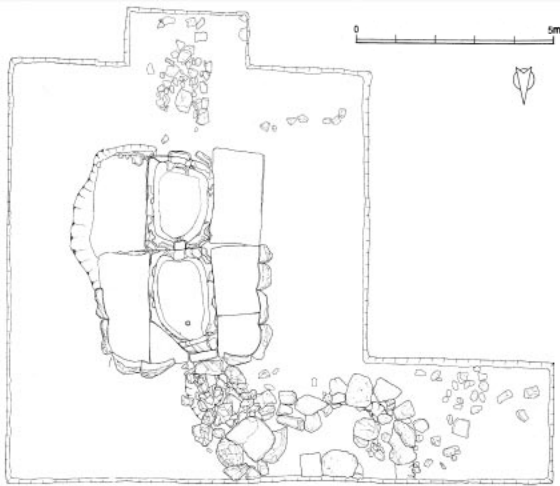


図-4 雁鴨池 護岸石垣立面図

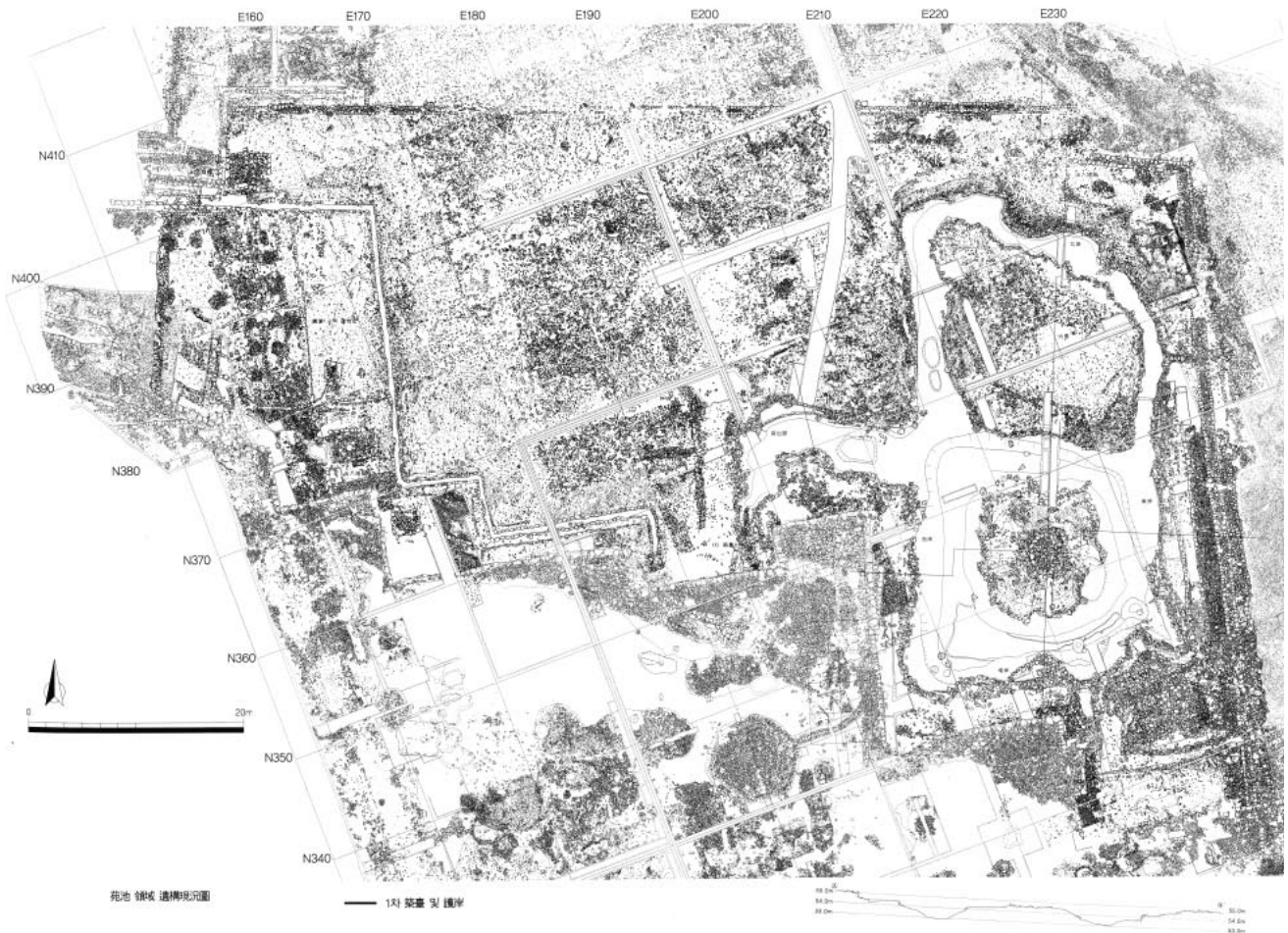
※本頁の図版は、参考文献5による。



図－6 雁鴨池 石槽の発掘平面図
※参考文献5による。



図－7 雁鴨池 入水溝の石槽



図－8 九黃洞園池遺跡 発掘平面図
※参考文献2による。

樂園을 象徵하는 韓國의 古庭園, 雁鴨池 庭園

洪 光杓 (東國大學校 教授)

I. 序論

기록이나 남겨진 유적으로 볼 때, 韓國의 庭園은 三國時代부터 造成된 것으로 보인다. 古代에 造成된 이 庭園들은 대부분 물을 중심으로 하고 있으며, 기이한 짐승들과 식물들이 도입된 樂園이었다. 이러한 樂園的 概念의 庭園은 통일신라시대, 고려시대, 조선시대를 거치면서 계속해서 조성되었는데, 지금까지 남겨진 정원을 보면 宮闕, 別墅, 士大夫家, 寺刹 등에 골고루 조영되었음을 알 수 있다.

한국의 정원이 낙원이라는 개념에서 설명될 수 있는 것은 韓國庭園이 追求하는 場所性이 神仙思想을 背景으로 하는 신비스러운 곳¹ 이거나 佛教의 淨土思想에 입각한 極樂淨土² 와 같이 인간이 理想郷의 世界로 동경하는 특별한 곳이기 때문이다.

韓國에서는 樂園과 통하는 개념으로 武陵桃源, 栗島, 西方極樂淨土 등을 생각해왔다.³ 이러한 理想郷들은 삶의 고통으로부터 해방된 곳이었으며, 완전한 질서를 가진 아름다운 곳이었다. 따라서 모든 인간들은 이러한 이상향을 항상 동경하여 왔으나 현실적으로는 다가갈 수 없었으므로 庭園을 만들어 現實世界에서 이러한 이상향을 접하고자 하였던 것이다.

韓國의 古庭園 가운데에서도 新羅王室의 東宮에 부속된 慶州의 雁鴨池庭園은 神仙思想을 바탕으로 하여 조성된 樂園이었다. 이 정원은 남아있는 한국 정원으로서 가장 오래된 것이며, 규모 또한 단일 정원으로서 가장 크다. 특히 雁鴨池는 屈曲이 심한 曲線護岸으로 이루어져 있어 독특한 造營美를 보이고 있다. 朝鮮時代에 造成된 韓國의 庭園들이 陰陽五行思想을 바탕으로 형성된 方形 池塘을 중심으로

¹ 三神山이나 巫山十二峰으로 대표된다.

² 韓國에서 淨土思想에 입각하여 조성된 정원은 佛國寺 九品蓮池를 중심으로 하는 정원이 대표적이다. 『佛國寺古今創記』에는 “嘉慶三年 戊午年에 연못의 연잎을 뒤집다”라는 기록이 있어 九品蓮池가 淨土의 象徵인 연꽃을 담은 그릇으로서의 기능을 했음을 확인할 수 있다. 九品蓮池는 淨土信仰의 九品蓮臺에서 연유한 명칭으로 淨土에 往生하는 이가 앉는 9種의 蓮花臺가 곧 九品蓮臺이다. 九品蓮池는 1970년대에 불국사를 복원하기 위한 발굴조사과정에서 그 실체가 드러났다. 발굴조사결과를 보면 九品蓮池는 靑雲橋와 白雲橋 남쪽 泛影樓 가까운 곳에 위치하고 있었으며, 동서장축 39.5m, 남북장축 25.5m, 깊이 2-3m 정도 되는 연지로 연못주변에는 큰 돌을 쌓았다고 한다. 九品蓮池와 極樂殿으로 올라가는 蓮花橋와 七寶橋는 의미적으로 서로 통하는 바가 있다. 즉, 蓮花橋는 九品蓮臺의 中上品인 蓮花臺를 의미하는 명칭이며, 七寶橋는 中中品인

七寶蓮臺를 의미하는 명칭이다. 九品蓮池가 연화교와 칠보교 그리고 안양문과 극락전 전면부에 조성된 것은 구품연지가 극락정토로 진입하는 과정이라는 것을 상징적으로 보여주는 하나의 수단이 되는 것이며, 이러한 제반 상황을 볼 때 구품연지가 정토정원이라는 것을 확인할 수 있다. 불국사에 조성되었던 정토정원 구품연지는 아직까지 복원되지 못한채 고스란히 땅에 묻혀있다. 하루속히 완전발굴을 실시하여 그 전모를 밝히고 복원을 서둘러 한국적 개념의 정토정원을 볼 수 있도록 하여야 할 것이다. 佛國寺 九品蓮池에 관한 내용은 다음의 論文이 도움이 된다. 洪光杓, 1994, 佛國寺 蓮池에 관한 一考察, 韓國庭園學會誌 12(2), pp75-82

³ 西洋人들은 유토피아(Utopia), 샹그릴라(Shangri-la), 엘도라도(El Dorado) 등과 같은 장소를 理想郷으로 생각해왔다.

이루어져있는 것이 일반적이라는 관점에서 본다면 雁鴨池는 韓國 池苑의 始原을 보여줄 수 있는 귀중한 資料가 아닐 수 없다.

本 研究에서는 雁鴨池 庭園에 대한 이해를 통해 韓國의 古庭園이 어떠한 形式과 內容으로 構成되어 있었는지를 밝히기 위한 目的을 두고 進行되었다. 雁鴨池 庭園의 分析을 위한 資料는 주로 雁鴨池 發掘調査報告書를 통해서 蒐集되었으며, 先行研究結果와 現場調査를 통해 發掘調査報告書에서 부족한 부분을 補完하였다.

II. 結果 및 考察

1. 概觀

1) 造營時期

『三國史記』卷6 新羅本紀 第7 文武王 14年(674)條에는 “궁내에 못을 파고 산을 만들었으며, 화초를 심고 진귀한 새와 짐승을 길렀다(宮內穿池造山 種花草 養珍禽奇獸)”라는 기사가 있다. 또한 『東國輿地勝覽』慶州條에는 “안압지는 천주사 북쪽에 있다. 문무왕이 궁내에 못을 만들고 돌을 쌓아 산을 만들어 무산십이봉을 상징하고 화초를 심고 진귀한 새를 길렀다. 그 서쪽에 임해전 터가 있는데……(雁鴨池 在天柱寺北 文武王於宮內爲池 積石爲山 象巫山十二峯 種花卉養禽 其西有臨海殿……)” 이 두 기사를 보면 雁鴨池는 文武王 14年(674)에 조성된 宮園池가 분명하며, 안압지에는 臨海殿이라는 전각이 있었음을 알 수 있다.

한편, 雁鴨池 발굴과정에서 出土된 文瓦에 “儀鳳四年”이라고 적힌 銘文이 있는데, 儀鳳四年은 唐 高宗 때의 年號로 文武王 19年(679)에 해당되며, 또 “調露二年”이라고 새긴 塼片이 出土되었는데, 調露二年은 文武王 20년에 해당된다. 이것을 보면 『三國史記』와 『東國輿地勝覽』의 記事가 틀리지 않았음을 알 수 있다.

雁鴨池가 조성된 시점의 時代狀況은 新羅가 三國을 統一하기는 하였으며 唐이 신라 땅에서 완전히 철수하지 않은 때여서 政治, 社會적으로 매우 不安

定한 때였다. 이러한 시기에 宮內에 雁鴨池와 같은 큰 못을 판 目的이 무엇인가에 대해서는 아직까지 분명히 밝혀진 것이 없다.⁴

2) 名稱

『三國史記』나 『三國遺事』에는 雁鴨池라는 이름이 나오지 않는다. 雁鴨池라는 이름이 보이는 것은 『東國輿地勝覽』에 와서인데, 『東國輿地勝覽』이 1481년에 편찬된 地理書라는 점을 감안한다면 雁鴨池라는 명칭은 15世紀 以前에 붙여진 것으로 보는 것이 옳겠다. 일반적으로 대부분의 학자들은 雁鴨池의 신라 때 이름은 月池였을 것으로 보고 있다(韓炳三, 1982:40, 鄭東旼, 1986:53-4). 雁鴨池의 신라 때 명칭을 月池로 보는 이유는 憲德王이 太子를 月池宮에 거처하게 하였다는 『三國史記』의 記錄과 月池에 관련된 職官으로 月池典과 月池嶽典이 있었다는 이유 때문이다.

雁鴨池라는 名稱은 梅月堂 金時習의 詩 ‘四遊錄’에 수록된 安夏池舊址에 나오는 安夏池가 비슷한 한자음인 雁鴨池로 바뀐 것으로 보는 견해와 朝鮮朝 姜瑋의 詩文 “十二峯低玉殿荒 碧池依舊雁聲長 莫尋天柱燒香處 野草痕深內佛堂”에서 보듯이 朝鮮時代에 들어와 廢墟가 된 못에 기러기와 오리가 棲息하는 것을 보고 雁鴨池라고 하였다는 見解가 있다(朴景子, 2001:121).

3) 思想的 背景

雁鴨池에는 池中에 세 개의 섬이 있다. 이것은 道教의 神仙思想에 의한 蓬萊, 瀛洲, 方丈의 三神山으로 생각된다. 한편, 『東國輿地勝覽』慶州條에서 보이는 “積石爲山 象巫山十二峯” 記錄 역시 雁鴨池의 造成背景이 神仙思想이라는 것을 보여주는 것이다.

이밖에 在來民間信仰으로서의 龍王信仰 또한 雁鴨池 造成의 背景이 되었을 수도 있으나 이를 입증할만한 分명한 記錄이나 遺物이 없는 실정이다. 단

⁴ 新羅가 三國間の 爭覇에서 百濟를 滅한 時期는 太宗武烈王 7年(660), 高句麗를 滅한 時期는 文武王 8年(668)이며, 唐을 新羅 땅에서 완전히 逐出한 때가 文武王 16年(676)이다.

지 雁鴨池 出土遺物인 접시, 盥, 대접 등의 內底面에 ‘辛審龍王’이나 ‘龍王辛審’과 같은 글자가 크게 陰刻되어 있음을 볼 때 雁鴨池에서 龍王祭를 지냈을 가능성은 있어 보인다(朴景子, 2001:122-126).

4) 象徵的 意味

『東國輿地勝覽』慶州條에 “...서쪽에 임해전 터가 있는데...(其西有臨海殿...)”라는 기사가 있음을 볼 때 雁鴨池는 바다(특히 동해바다)를 象徵하는 意味를 지니고 있었음을 알 수 있다. 이렇게 볼 때, 雁鴨池 池中에 조성된 세 섬은 동해바다에 떠 있는 三仙島를 상징하는 것으로 자연스럽게 연결될 수 있다. 한편, 앞서 말한 龍王信仰이 雁鴨池에 게재되어 있다면, 雁鴨池에는 용이 사는 神秘性이 덧붙여지게 된다.

2. 造成形式

1) 空間構成

雁鴨池 庭園은 池塘인 雁鴨池를 中心으로 構成된다. 雁鴨池는 땅을 파내어 물을 끌어들이고 그 파낸 흙으로 假山을 만들고 섬을 쌓아 만든 人工池인데, 그것의 전체 범위는 東西 200m, 南北 180m로 거의 方形區域 안에 造成되어 있으며, 못의 全體 面積은 15,658㎡이다.

못의 全體의인 形態는 ‘ㄱ’字 形을 하고 있으며, 自然地形을 이용하여 直線과 曲線이 다양한變化를 가지며 調和를 이룰 수 있도록 護岸을 造成하였다(高敬姬, 1989:21-22).

못을 중심으로 東쪽과 北쪽 편은 자연스러운 曲線의 丘陵으로 造成되어 있고, 西쪽과 南쪽 편은 建物地로 조성되어 있어서 對照的인 景觀을 보이고 있다.

못 안에는 세 개의 섬이 있으며, 못을 중심으로 周邊을 回遊할 수 있도록 動線體系가 마련되어 있다.

2) 護岸

못의 南岸과 東岸은 直線으로 處理하고, 北岸과 東岸은 複雜한 曲線으로 屈曲護岸을 이루게 하였다.

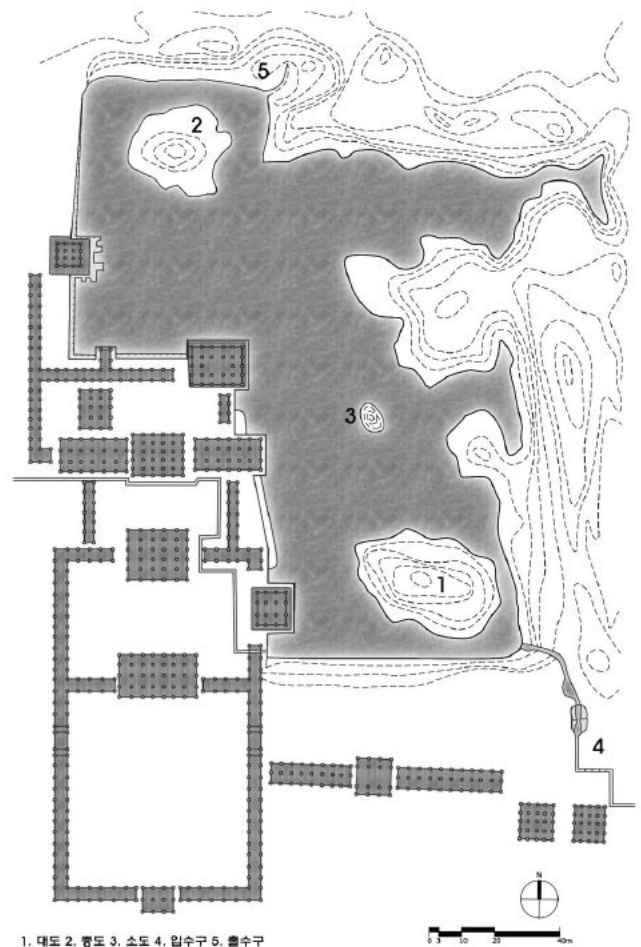


그림 1 雁鴨池 配置平面圖



그림 1 雁鴨池 配置平面圖

護岸은 다듬은 돌로 石築을 하였는데, 護岸石築이 直線으로 처리된 南岸과 西岸은 地形上 東岸과 北岸보다 약 2.5m 높아 護岸石築 역시 東岸과 北岸보다 높게 하였다. 西岸에는 5個所의 建物이 못에 沿해서 造成되어 있는데, 이들 建物의 基壇石築은 護岸石築보다 연못 쪽으로 突出시켜 築造하였다.

護岸石築은 북쪽과 동쪽의 경우에는 높이 1.5m 안팎의 曲線石築으로 垂直에 가깝게 한 단으로 쌓아 올렸다. 반면 서쪽 護岸은 直線으로 처리되어 있으며, 建物이 있는 곳은 높이 1.8m 내외의 1단 석축이고 건물이 없는 곳은 下層護岸과 上層護岸이 폭 2m를 사이에 둔 上, 下 2段 石築으로 되어 있다.

建物地와 접한 護岸石築의 基단은 물에 잠기는 부분의 경우에는 모두 길이 0.8m-2.3m의 자연석으로 앞면만을 다듬어 쌓았고, 수면 위에 보이는 부분에는 대부분 길고 높은 長臺石(길이 1-2m, 높이 55cm)을 다듬어 쌓았다.

못의 남쪽 護岸은 거의 단조로운 直線形態이며, 護岸과 땅 위와의 거리는 傾斜面으로 만들고 그 사이에 怪石을 놓고 꽃과 나무를 심어 造景을 하였다. 연못의 護岸石築 길이는 총 1,005m이며, 섬의 護岸石築을 포함하게 되면 1,285m에 달한다.

3) 섬

섬은 못 속에 세 개가 있는데, 가장 큰 섬(1,094 m²)은 연못 남쪽에 長軸을 東西로 하여 자리를 잡았고, 중간 크기의 섬(596m²)은 큰 섬과 對稱方向인

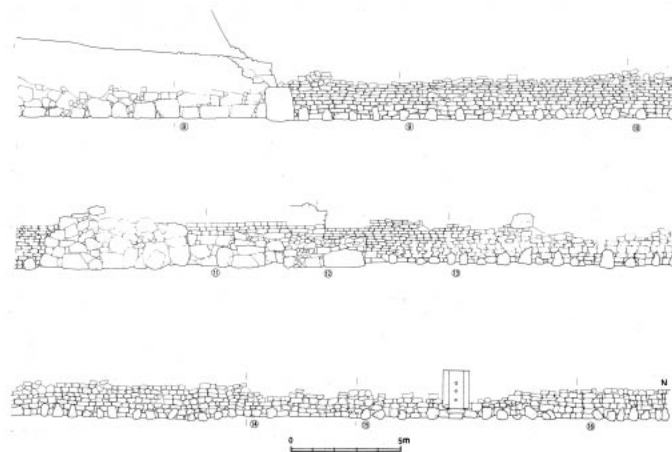


그림 4 護岸石築 立面圖

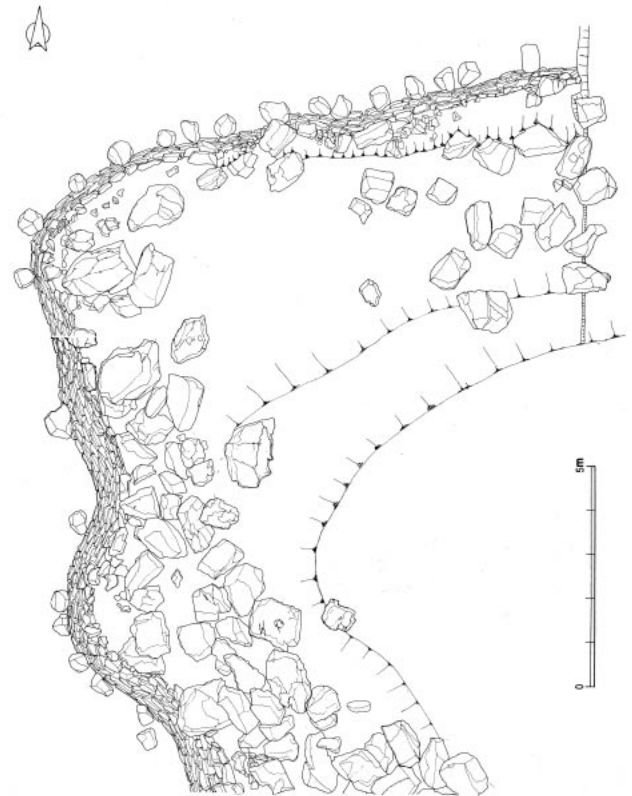


그림 3 護岸 發掘平面圖

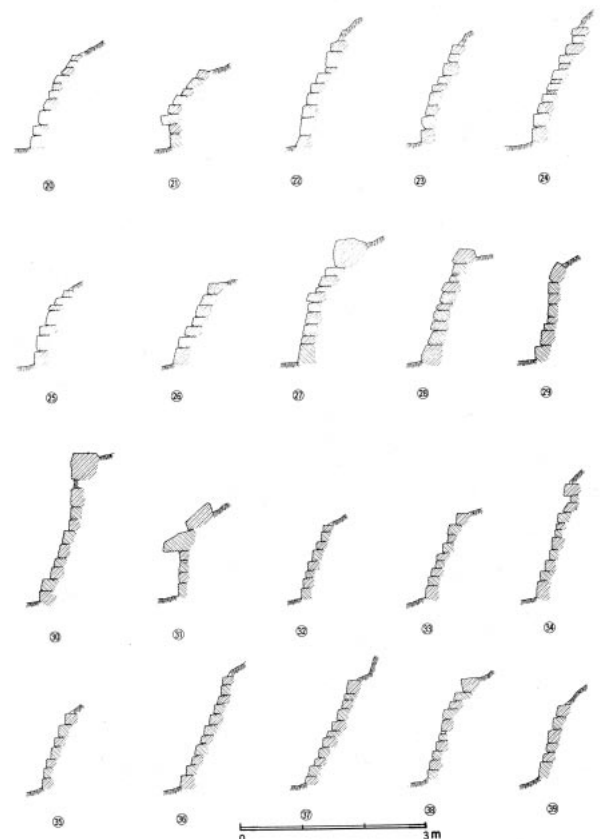


그림 5 護岸石築 斷面圖

못의 西北쪽에 위치하고 있고, 가장 작은 섬(62㎡)은 못의 한가운데에서 약간 남쪽으로 치우친 곳에 있다. 세 섬은 모두 人爲의으로 築造한 것으로 높이 1.7m 내외로 쌓아올린 石築 위에 흙으로 假山을 만들었다. 석축 아래에는 큰 냇돌을 등 간격으로 놓아 호안석축을 받치도록 하였다.

섬에는 怪石을 놓고 진귀한 꽃과 나무를 심었으며, 새와 동물들이 놀았음을 發掘調査결과를 통해서 알 수 있다.

4) 峽

東쪽 護岸에는 3개의 깊은 海峽같은 絶妙한 屈曲의 峽이 있다. 2개는 상당히 깊고 1개는 그렇게 깊지 않다. 이 峽 가에는 모두 2.1m 정도의 石築을 80° 정도로 눕혀서 쌓아 造山의 土量을 保護하고 있다. 제일 깊은 협은 北쪽 호안을 끼고 東으로 쭉 뻗은 것인데, 깊이가 90m 쯤 되고 협 입구 못 넓이는 30m 쯤 되며, 들어갈수록 좁았다 넓었다 하여 변화가 무쌍하다. 아주 좁은 곳이 4.5m 정도이며, 이 峽의 周圍 護岸은 20여 개의 屈曲을 주었다. 峽의 가장 깊은 곳에는 배에서 내릴 수 있게 4段의 階段이 護岸에 設置되어 있다. 東쪽 護岸 중심에 있는 峽은 깊이가 35m 쯤 되고 입구의 넓이는 14m 정도이다. 다음으로 그리 깊지 않은 큰 屈曲 같은 峽이 있는데, 이것은 못의 동쪽 중앙이 되어 서쪽에서 바로 건너다 보이게 되어있다.

5) 半島

東쪽 造山과 峽의 사이에 半島가 두 개 있다. 北쪽의 半島는 아주 큰 것인데, 동쪽에서 서쪽 못 속으로 손바닥처럼 내밀고 있다. 이 반도는 뿌리에서 65m 길이이며, 12個의 屈曲을 이루고 있고, 크게 세 개의 突出面을 만들어 複雜한 海岸線 같이 되어있다. 이 半島 南쪽에 있는 또 하나의 반도는 못의 東쪽 護岸에서 北쪽을 향하여 30m 정도 突出되어 있다. 護岸은 여섯 곳 정도에 屈曲을 주어서 變化를 주었다.

6) 造山

雁鴨池 북쪽 護岸가에는 東西길이가 80m 정도되는 造山이 세 개의 봉우리로 배치되어 있다. 造山에

는 自然石을 配置하여 깊고 험준한 산의 변화를 느낄 수 있게 조성하였다. 동쪽 護岸과 半島에도 造山을 造成하여 작은 봉우리들이 連續되도록 만들어져 있다. 오랜 세월이 지나는 동안 깎여 나간 것을 감안한다면 지금보다는 높았을 것으로 생각된다. 『東國輿地勝覽』 등 古文獻에서는 이 造山을 巫山十二峰으로 記錄하고 있는데, 造山에는 아름다운 花草와 珍奇한 짐승들이 있었을 것으로 보인다.

7) 入水溝와 出水溝

雁鴨池에 물을 대는 入水施設은 못의 東南쪽 모서리 부분에 있는데, 自然石 石構-加工된 돌로 만든 加工石溝-自然石 水溝施設-2個의 石槽施設-작은 못-瀑布모양의 施設과 같은 6段階의 施設로 構成되어 있다. 여기에서 특기할 만한 것은 2個의 石槽인데, 이것은 南北으로 5m, 東西로 4m 區間에 南北으로 놓여있다. 南쪽의 石槽는 길이 2.4m, 너비 1.65m로 柔軟한 曲線으로 된 거북이 모양이며, 石槽의 가장자리를 파서 물이 고이도록 했고, 北쪽을 향한 면을 움푹 파서 이곳을 통해 물이 40cm정도 낮게 설치된 북쪽의 石槽로 넘치도록 되어 있다. 北쪽의 石槽는 길이 2.66m, 너비 1.65m로 이 역시 거북이모양이며, 南쪽의 石槽와 마찬가지로 물 빠기 홈을 두었다. 南北 石槽 양쪽에는 길이 2.4m, 너비 1.2m의 큰 板石을 놓고 이들 板石 外緣으로 길이 80cm 내외, 높이 28cm의 外緣石을 屏風 두르듯이 設置하였다. 瀑布모양의 施設은 작은 못을 통과한 물이 너비 2.5m, 높이 70cm의 層級石段을 통과하여 세 개의 板石을 이용하여 만든 2段 瀑布를 통해 소리를 내며 못에 入水되도록 하였다. 上下 板石의 높이 차는 1.2m이다.

出水溝는 北쪽 護岸 中間에 있으며, 水位를 調節하는 特殊施設, 長臺石으로 쌓은 石溝, 木製 水溝, 長臺石 石溝 등 4段階로 構成된다. 特殊施設은 護岸石築面に 맞추어 길이 1.5m, 높이 0.3m의 長臺石을 2段으로 쌓고 1段과 2段의 이음부분에 直徑 15cm의 구멍을 뚫어 그곳에 목재 마개를 꽂아 놓은 것이었다. 또 2段의 長臺石 중 위에 놓인 장대석 上面에는

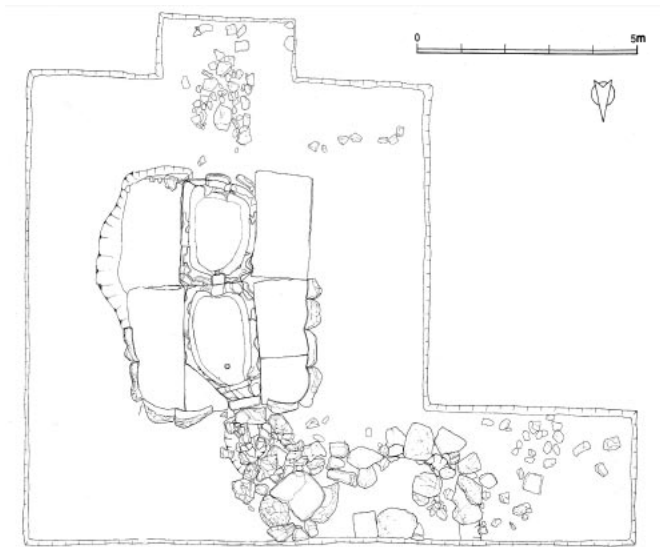


그림 6 石槽 發掘平面圖



그림 7 石槽寫眞

碑座모양으로 너비 15cm, 길이 1m, 깊이 1cm의凹부 위에 어떤 부재를 놓았던 것으로 보인다.

8) 植物과 動物

雁鴨池의 半島와 섬에는 다양한 종류의 珍奇한 花草와 動物들이 있었다고 한다. 『三國史記』文武王 14年 記事를 보면 雁鴨池의 섬에 심은 것은 灌木類나 草花類였을 것으로 보인다. 이것은 큰 나무를 심으면 造山의 形態와 怪石을 볼 수 없었기 때문에 취한 조치였다. 이때, 雁鴨池에 導入한 花草類는 眞平王 때 新羅에 들어온 모란이거나 국화, 난, 치자, 향초, 철쭉, 석류, 연축, 산수유 같은 것을 것으로 추정된다(鄭在鏞, 1996:56).

한편, 發掘調査過程에서 거위, 오리, 산양, 사슴, 돼지, 말, 개의 뼈가 出土되어 당시 雁鴨池에 살았던

動物들까지도 想像할 수 있게 한다.

3. 考察

1) 樂園으로서의 概念

雁鴨池가 낙원으로서의 성격을 보이고 있음은 지중에 있는 3개의 섬이 삼신산을 의미할 것이라는 생각과 『東國輿地勝覽』慶州條에 실린 “雁鴨池에 돌을 쌓아 산을 만들어 巫山十二峯을 상징하였고 화초를 심고 진귀한 새를 길렀다”는 기사 때문이다.

雁鴨池 池中에 造成된 3個의 섬은 三神山을 象徵하는 것으로 볼 수 있다. 이것은 『三國史記』에 百濟武王이 634년 부여의 宮南에 못을 파고 못 속에 方丈仙山을 모방하였다는 기사를 통해서 생각해 볼 때, 雁鴨池에 造成된 三神山이 바로 三神山 說話에 나오는 蓬萊山, 方丈山, 瀛洲山 중의 하나라고 유추해 보는 것이다. 한편, 三國時代에는 花郎을 國仙이라고 부르기도 하고 仙郎, 神仙, 仙 또는 仙風이라 하여 神仙思想에 뿌리를 박고 있다. 이것을 보면 雁鴨池를 조성할 당시에 韓國 固有의 神仙思想도 유행하였음을 알 수 있다. 이러한 측면에서 볼 때 雁鴨池의 세 섬에 神仙思想을 移入시키는 것은 크게 무리가 없어 보인다.

『東國輿地勝覽』에서 보이는 巫山十二峰은 中國戰國時代 楚나라 襄王이 기주의 雲夢에서 仙女와 노닌 古事에서부터 시작되었다. 『古文眞寶』前集七卷에 실려 있는 李太白의 觀元丹丘坐巫山屏風詩의 註釋에 十二峰의 이름을 望霞, 翠屏, 朝雲, 松巒, 集仙, 聚鶴, 淨壇, 上昇, 超雲, 飛鳳, 登龍, 聖泉이라 하였다. 그리고 679년에 건립한 東宮의 正殿 이름이 臨海殿이며, 哀莊王 5年(804) 東宮內에 萬壽房을 짓는다. 『東國輿地勝覽』에서 보이는 巫山十二峰이나 臨海殿, 萬壽房 등은 神仙思想과 연관된 名稱이다(문화재관리국, 1978:377). 이것을 볼 때 雁鴨池는 神仙思想을 바탕으로 해서 조성된 庭園이라는 것을 알 수 있으며, 이러한 神仙思想은 곧 樂園이라는 理想鄉의 世界와 疏通하게 되는 것으로 이해할 수 있다.

2) 雁鴨池 造成의 모티브

雁鴨池가 造成될 當時에 新羅에서는 東向重視思想이 유행하고 있었다. 그러한 證據로 脫解王을 東岳의 神으로 推仰하는 것, 石窟庵 本尊佛의 方向을 文武大王陵이 있는 東海口 쪽으로 向하게 配置하는 것 등을 꼽을 수 있다. 新羅人들에게 있어서 吐含山 너머의 동해바다는 護國의 震源地였던 것이다. 특히 東海口는 바닷물과 민물이 합쳐지는 곳으로 海岸線이 복잡한 리아스식 海岸의 構造를 지니고 있다.

雁鴨池가 造成된 東宮의 主殿이 臨海殿이라는 명칭을 쓰고 있는 것은 바다에 면한 건물이라는 象徵性을 구체적으로 보여주는 것이다. 이것으로 볼 때 雁鴨池는 바다를 표현한 것이며, 특히 文武大王의 水中陵이 있는 東海口를 모티브로 삼았던 것으로 보인다.

3) 雁鴨池 前後의 韓國庭園

文獻記錄이나 遺蹟, 遺物을 통해서 볼 때, 新羅時代에 造成된 庭園은 雁鴨池가 最初이다. 그런데 이미 百濟時代에 만들어진 庭園에 대한 記錄은 여럿 나타난다. 즉, 『三國史記』 卷 第25 「百濟本紀」 第3 辰斯王 7年(391)條를 보면 “정월에 궁실을 중수하고 못을 파고 산을 만들어서 기이한 짐승과 화초를 길렀다(春正月 重修宮室 穿池造山 以養奇禽異卉)”라는 記事가 있고, 『三國史記』 卷 第26 「百濟本紀」 第4 東城王 22年(500)條에는 “봄에 궁성 동쪽에 임류각을 세웠는데, 높이가 5장이었다. 또 못을 파고 진기한 날짐승들을 길렀다(春 起臨流閣於宮東 高五丈 又穿池養奇禽)”라는 記事가 있으며, 『三國史記』 卷 第27 「百濟本紀」 第5 武王 35年(634)條에는 “3월에 궁 남쪽에 못을 파고 물을 20여리나 끌어들이었으며, 못가의 네 언덕에는 버드나무를 심고 못 속에 섬을 만들어서 방장선산을 흉내 내었다(三月 穿池於宮南 引水二十餘里 四岸植以楊柳 水中築島嶼 擬方丈仙山)”라는 內容의 記事가 있다. 이것을 보면 百濟가 新羅보다 庭園造成의 歷史가 빨랐던 것을 알 수 있다.

雁鴨池가 造成된 時點이 新羅가 百濟와 高句麗를 滅하고 三國을 統一한 直後였다는 점을 생각한다면,

雁鴨池 造成에 百濟人들이 동원되었을 가능성은 충분히 짐작하고도 남음이 있다. 따라서 歷史的 時點으로 볼 때 雁鴨池는 百濟의 庭園技術이 바탕이 되어 만들어졌을 가능성이 매우 높다.

한편, 『日本書紀』 推古天皇 20年條(612)에는 “百濟에서 歸化한 路子工이 宮室 남쪽 沓에 須彌山을 꾸미고 吳橋를 놓았다”는 기록이 있다(金龍基, 1996:406에서 再引用). 이러한 기록을 보면 百濟의 庭園造成技法이 日本에까지 影響을 미쳤던 것으로 볼 수 있어 新羅의 東宮園池인 雁鴨池 庭園과 日本의 古代庭園이 여러 가지 측면에서 類似性을 지니고 있을 가능성이 있음을 示唆하고 있다.

雁鴨池 造成 以後 統一新羅時代에 만들어진 龍江洞園池(嶺南文化財研究院, 2001)와 九黃洞園池(國立慶州文化財研究所, 2008)는 雁鴨池와 같이 曲線護岸으로 되어있으며, 池中에 섬을 두고 있어(龍江洞園池는 南北 2島, 九黃洞園池는 大小 2島) 雁鴨池와 類似한 形式이라는 것을 확인할 수 있다. 이것을 보면 雁鴨池와 類似한 形式의 못이 庭園의 中心이 되는 것은 當時로서는 一般的이었던 현상이었던 것으로 보인다.

新羅時代以後 高麗時代와 朝鮮時代를 거치면서 궁궐을 비롯한 많은 곳에 정원이 조성되었으며, 아직까지도 많은 정원들이 남아서 전해지고 있다. 남겨진 庭園遺蹟을 통해서 살펴볼 때 朝鮮時代로 오면서 韓國의 庭園은 陰陽五行說을 바탕으로 하는 圓島方池를 중심으로 庭園이 造成되는 傾向을 보이게 된다는 것을 알 수 있다. 정원의 중심이 되는 이러한 圓島方池는 宮闕뿐만 아니라 別墅, 士大夫庭園 등에서 예외 없이 나타나고 있으며, 雁鴨池와 같은 形式의 못은 더 이상 찾아보기가 어렵게 되었다. 이것을 볼 때 朝鮮時代로 移行하면서 韓國庭園에서는 雁鴨池와 같은 池塘樣式이 더 이상 傳承되지 못하였음을 알 수 있는데, 그 이유에 대해서는 알 수가 없다.



그림 8 九黃洞園池遺蹟發掘平面圖

III. 結論

雁鴨池 庭園은 統一新羅時代에 造成된 雁鴨池를 중심으로 형성된 韓國의 古庭園이다. 雁鴨池는 直線과 曲線의 護岸이 신비스러운 調和를 이루고 있으며, 池中에는 3個의 섬이 있어 三神島를 象徵하고 있다. 雁鴨池 東側편과 北側편에는 造山을 하였고 怪石을 놓아 視覺的 效果를 높이고 있는데, 이는 巫山十二峯을 象徵하는 것으로 보인다.

雁鴨池가 樂園으로서의 象徵性を 보이는 것은 역시 세 개의 섬과 巫山十二峯의 存在 때문이다. 三神山과 巫山十二峯은 道敎의 概念의 神仙思想을 바탕으로 형성되는 것으로 神仙思想은 現實世界에서는 도달할 수 없는 신비로운 場所性을 가진다. 이러한 神仙思想이 雁鴨池 造成의 背景이 되었다면 雁鴨池가 樂園으로서의 象徵性を 지니는 것에 의심의 여지가 없을 것으로 생각된다.

雁鴨池 造成의 모티브는 역시 동해바다였을 것으로 보는 것이 타당하다. 동해바다 가운데에서도 특히 東海口는 新羅人들에게는 聖所로 여겨지던 곳이었다. 이러한 聖所를 가까이 끌어다 놓고 쉽게 접하고자 함은 신라인들이 꿈꾸던 所望이었을 것이다.

雁鴨池가 造成된 이후 統一新羅時代에 龍江洞園池와 九黃洞園池에서 雁鴨池와 유사한 屈曲이 심한 曲線形 池塘이 조성되기는 하였으나 高麗, 朝鮮時代를 거치면서 韓國의 庭園은 陰陽五行思想에 입각한 圓島方池를 중심으로 이루어지는 것이 일반적이어서 雁鴨池의 造成樣式이 계속해서 傳承되지는 못한 것으로 보인다. 단지 日本庭園의 池塘樣式과의 類似性을 發見할 수 있어 日本으로의 轉移與否가 注目되는 바이다.

本 研究는 雁鴨池에 대한 概括的인 內容과 造成形式에 대한 것을 다루었으며, 몇가지 중요한 논의사항에 대하여 考察하였다. 향후 韓, 中, 日 三國의 庭園에 대한 比較研究가 進행된다면 三國間의 庭園樣式의 交流에 대한 理解가 增進될 것으로 보인다.

參考文獻

高敬姬, 1989, 雁鴨池, 대원사

國立慶州文化財研究所, 2008, 慶州 九黃洞 皇龍寺址展示館 建立敷地內 遺蹟-九黃洞園池遺蹟

金富軾, 1145, 三國史記; 李丙燾譯註, 1983, 三國史記 上, 下, 乙酉文化社

金龍基, 1996; 韓國造景學會, 東洋造景史, 文運堂

文化財管理局, 1978, 雁鴨池發掘調查報告書

朴景子, 2001, 雁鴨池 造營計劃研究, 學研文化社

嶺南文化財研究院, 2001, 慶州龍江洞園池遺蹟, 學術調查報告 30冊

鄭瞳昨, 1986, 韓國의 庭園, 民音社

鄭在鏞, 1996, 韓國 傳統의 苑, 圖書出版 造景

韓炳三, 1982, 雁鴨池 名稱에 대하여, 考古美術 153

洪光杓, 1994, 佛國寺 蓮池에 관한 一考察, 韓國庭園學會誌 12(2), pp75-82

洪光杓・李相潤, 2001, 韓國의 傳統造景, 東國大 出版部